

## ベーテルを訪ねて

# キリスト教社会福祉「ディアコニー」の歴史検証

2006.8.23-24

ドイツのキリスト教社会福祉の中心をなすものの一つは「ベーテル」の施設といえる。5千人の利用者患者を5千500人の看護師が看るこの施設は一牧師ボーデルシュヴィンクが町外れの農家でひっそりと暮らす数人のてんかん病患者を引き受け、施設で働くディアコニー養成学校をつくることからスタートした。事業を引き継いだ子フリッツの時代は、第二次世界大戦に突入し、治る見込みのない障害者を「生きるに値しない命」として安楽死を実行し30万人の障害者を殺害するという嵐の時代であった。ボーデルシュヴィンクは敢然と立ち向かい、自分の施設からは犠牲者をひとりも出さなかったとして世界に知られることになる。河島幸夫西南学院大学教授はユダヤ系の患者9人がこっそり連行されていたことを検証している。こうした事実を踏まえても、創立以来176年を迎える「ベーテル」について、このたびキリスト教社会福祉「ディアコニー」の歴史を検証するために訪問することができて大変学ぶことができました。それは別の機会にして、ベーテルの概略を紹介したいと思う。

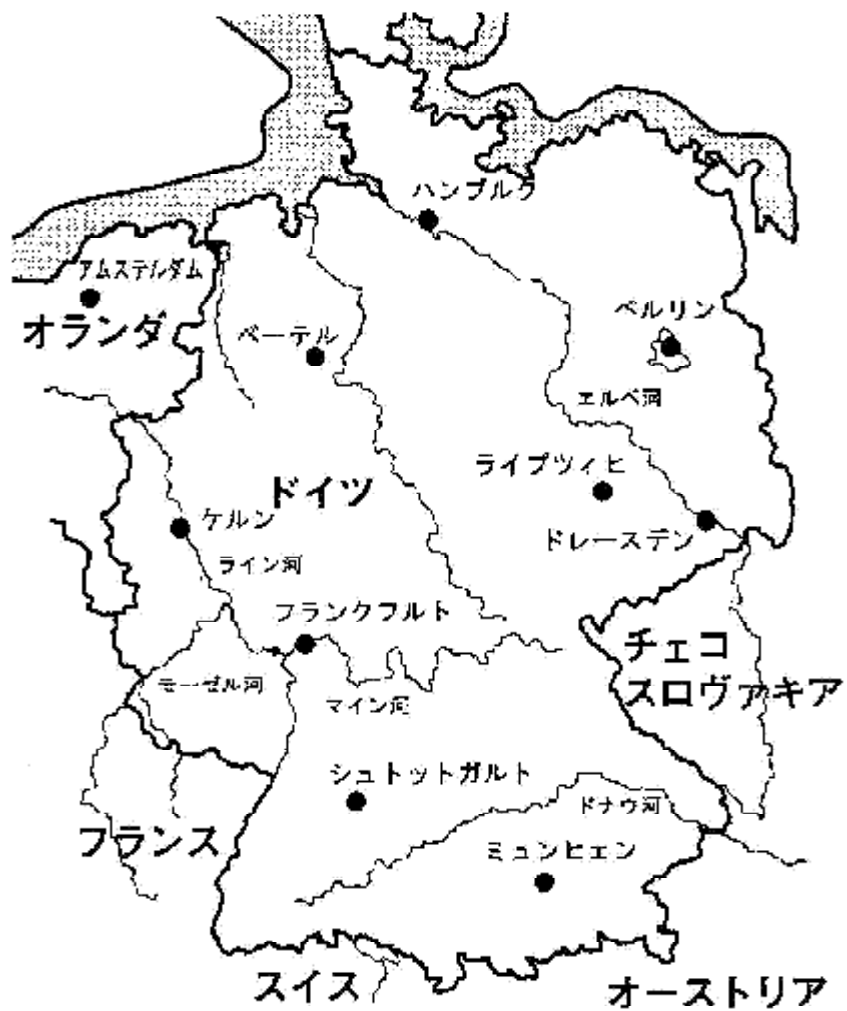
ヒュウステバック節子さんは施設「ベーテル」で長年働いて定年を迎え、その日常生活の記録から「われよわくとも」(ドメス出版、2006)という本を出版された

。

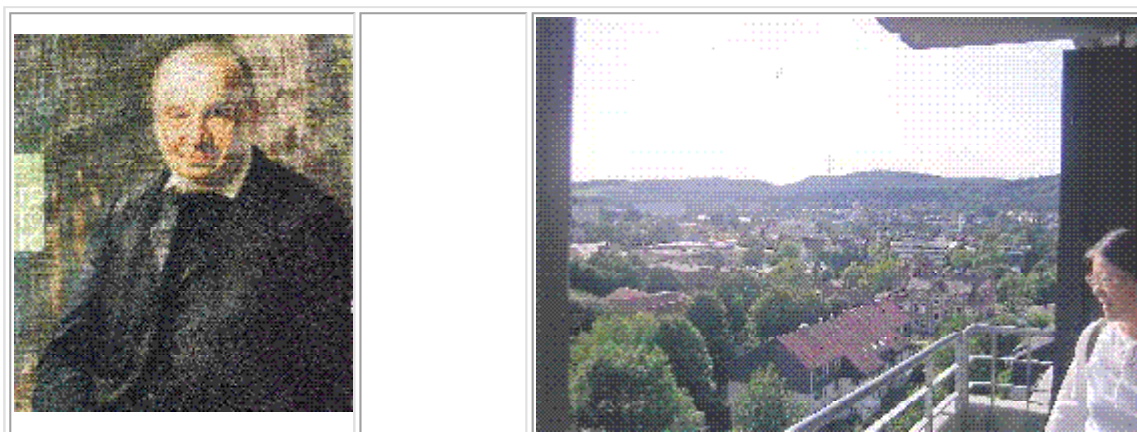
彼女は以前、「いずみの園」(在中津市、日本キリスト教団九州教区社会福祉事業団)で話をされたことがあるが、その時、私は参加できなかった。この施設、「いずみの園」にある「ディアコニー研究所」が計画したもので、ベーテルに行くときはヒュウステバック節子さんと連絡を取ることをめすめられた。6月に出した手紙が8月の出発まぢかに宛先人不在で戻ってきた。そこで、ドメス出版に電話をして、節子さんの連絡を訪ねたところ、東京ということがわかり連絡がついた。

それで、ベーテルの地図と最近のDVDと、どう歩いたらよいか、どこで資料がもらえるかと詳しい案内を書いて送ってくださった。それは大変助けになり、感謝

いたします。この導きによって、以下、報告をしたい。

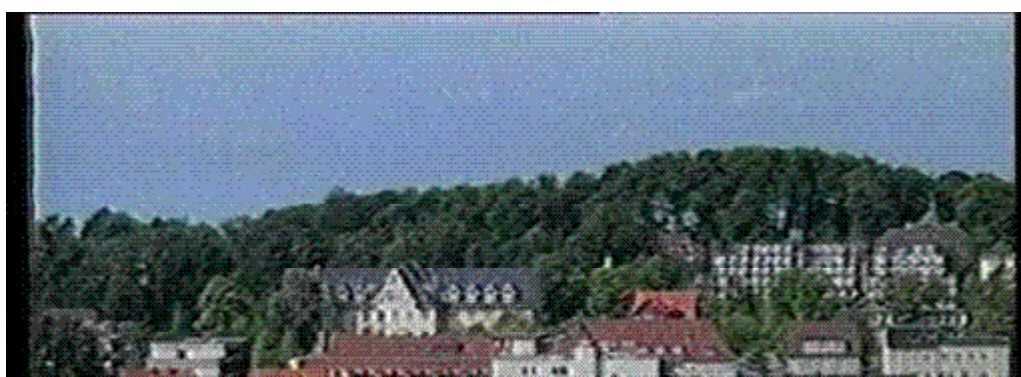


ベーテルはドイツの北西部、上記地図のケルンからベルリンまたはハンブルクに向かう道筋にある人口32万人、ドイツで12番目の都市ビーレフェルト市中の3.5平方キロメートルの敷地にある。



ベーテルを臨む

上は創立者ボーデルシュヴィンク 右は後に訪問された方、全景





ベートルの全景写真は、ひろすぎて、ない、DVDの中から感じがよみとれる画像をピックアップした



1. まず最初に、

右の円形の建物はベートルシンボリックな建物で、  
ベートルの玄関口であった。

2. シュピールキステ

精神科の患者の人々が働いている。  
作られた製品を販売している。



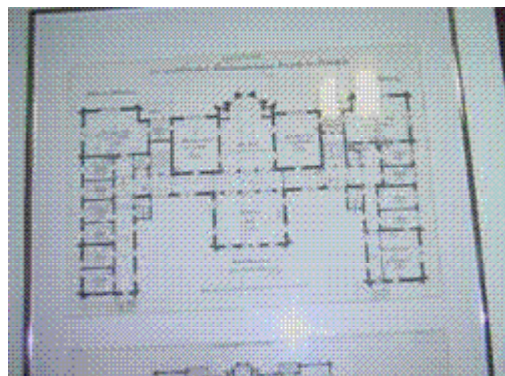
3. 歴史資料館(Historische Sammlung)

ボーデルシュヴィンクの大きなポスターが貼られている家、ボーデルシュヴィンク  
父子の資料館、ベートルの歴史がみられる。以下歴  
史資料館の資料をいくつか示そうと思う。



初期に作られたサレプタ母の家

デアコニッセ養成学校



設計図





ディアコニッセの養成



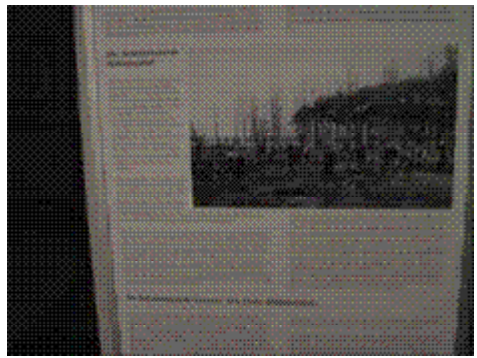
働くことによって、自立を目指す、機織り機



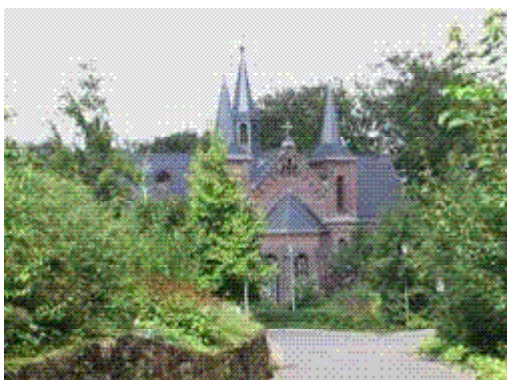
金属工作



よく分からないかもしれないが、  
個室の部屋の様子を展示している。  
日本では4人部屋が主で個室の考えは  
今も標準的ではない



労働者コロニーの写真  
働かずに食べさせることはよくない。  
働く場を提供したもの。

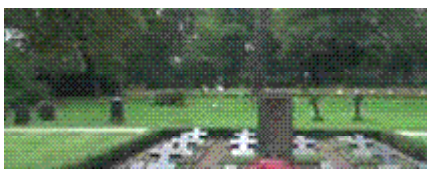


4.ツィオン教会

父フォン・ボーデルシュヴィンクが指揮して  
建てたベーテルの教会。  
この日はお葬式の準備がなされていた。  
親族の数人と牧師さんが歓談していた。

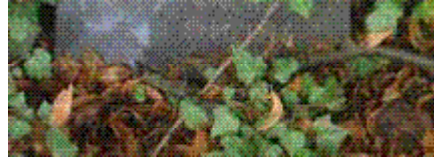


(上写真はDVDより)





5.アルター フリートホーフ 墓地  
ホーデルシュヴィンク家族の墓



ハウスマスター  
施設長のディアコーンのお墓。



お墓の管理をしている人たち、これも自分  
にできる能力を生かす作業療法として  
位置づけられている。



6.年老いたディアコニッセの  
老人ホームなどがある区域、



7.乗馬療法の馬場



8.ブロッケンザムルンク  
寄付された中古品などを一般に売る場所。イエスは五千人  
に食べさせたあと残ったパンを集めさせた。「残ったパンのか  
けら(Brocken)を集めなさい」と言われたことに由来している。



マムレ・パトモスシューレ  
主としててんかんをもつ障害児の学校



3、4人駅で青い前掛けのようなものをした人たちがいて、道を尋ねると親切におしえてくれた。この人たちが現在の鉄道ミッションの人たちである。

ドイツの場合は、奇跡的な経済回復もあって、1959年には、外国からの援助物資を断り、それを発展途上国に送るようになり、また同年のクリスマスには「世界の人々にパンを」献げる呼びかけがなされ、ドイツは世界教会運動の援助国の最先端にたつようになった

ほんの一部ですが、ヒュステベック節子さんの手紙による案内に導かれたバーテル訪問を終わります。

訪問の目的は「ディアコニー」の歴史の本を翻訳するにあたりまったく知らないのにできるだろうかという心配とその検証作業が目的であった。たとえば、労働者コロニーとは何なのか。資料室の写真によって少しわかった。またヨハネス・クーローによるトロンボーン伝道については、写真にトロンボーンでなくホルンであることが分かるなど、いくつか判明したことだけでも、大きな成果があったといえる。

[ホームページ](#)

[サイトマップ](#)